

第6回グラフィック「1_WALL」展

2012年2月27日(月)～3月22日(木)

公開最終審査

2012年3月9日(金) 6:00p.m.～9:15p.m.

計算されたチープなスタイルに可能性を見出され、満票を得てグランプリに!

曾我蕭白の絵に登場する人物と落書きを組み合わせ、スクリーントーンを用いながら描いた人物をシール紙に印刷して展示した田中さん。計算されたチープさがどう展開していくのか、期待と不安が入り乱れる魅力が審査員を引きつけました

受賞作 「スタンド・アローン・コンプレックス」

「この人物たちは、これからどうなっていくのだろう。作者自身でわかっていない。それでも創っていくうちにわかってくるだろう、という漠然とした確信はある。ドキドキしたい。いろんな人や出来事やイメージから受けとったドキドキした感覚を、この一体一体の人物たちに投影していきます。そんなドキドキをあなたと共有できれば最高です」



審査員コメント

大塚いちお

「危うさもあるけど、魅力もその危うさの中に存在している。作品のもつチープさを自分の言語として何か伝えようとしているのでは。これをひとつの方法として何か次に繋がっていくような期待感というのをすごく感じる」

菊地敦己

「実は完成度が高い作品。細かなところまで神経が配られている。ただ、それゆえに自分が良いと思った状態を崩せない頑さがあって、そこが壁かもしれない。他の作品を知らないの、どういう振れ幅を持っているのか期待と不安がある」

室賀清徳

「方法と世界を持っている。この両方を持っているから、汎用性もあるし、どんどん生成力もあるし、いろんな媒体で展開できそう」

佐野研二郎

「人の目をちゃんと意識して描いている。見る側に想像させる力があって、見ていて飽きさせない絵だと思う。シールの展示もぞんざいな感じがハンドメイドの良さを感じさせたし、1点1点の間の取り方もよかった」

高井薫

「スタンド・アローン・コンプレックスというタイトルの選び方にしても、ポートフォリオに入っているキャラクターの選び方にしても、実はよく考えられていて、スマートでコンセプトチャル。プレゼンテーションにもそのよさを期待」



田中豪 Go Tanaka

1983年生まれ。



FINALISTS ※五十音順

秋元理恵
1丁目
大小島真木
小田原垂梨沙
顧彬彬
田中豪

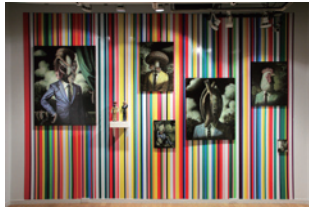
JUDGES ※五十音順、敬称略

大塚いちお (イラストレーター・アートディレクター)
菊地敦己 (アートディレクター)
佐野研二郎 (アートディレクター)
高井薫 (アートディレクター)
室賀清徳 (『アイデア』編集長)

■ 出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略



1丁目 1cyome
「せいぎのみかた」



「ウルトラQ」をモチーフにした作品。震災以降、未来予測が立たなくなり、不条理感だけが現実になった。悶々とした日々、突然私の脳裏に映像が浮かんだ。モノクロで混沌としたマースリングが渦巻く「ウルトラQ」のオープニング映像。それを美術作品として形にしたいと思った。

〈質疑応答〉

- 大家: ビニールテープを背景に配した展示は当初のイメージ通りなのか?
- 1丁目: 「ウルトラQ」のイメージを出したいと思い、狙った表現。
- 菊地: 背景のビニールテープのストライプは作品なのか?
- 1丁目: それも含めて一つの作品として展示している。白壁ではイメージを出せなかった。



顧彬彬 Pinpin Co
「REPLAY」



絵を描くというよりは、何かを記録している。何を描いているというよりは、何に描いているか。私にとっては、描いている時間が大切。その時間を再生するという意味を込めて、ある人と1か月間過ごしたことを作品にした。深く印象に残った出来事の一つひとつ線を結ぶように描いている。

〈質疑応答〉

- 大家: 絵の対象は? このような表現をしている意図は?
- 顧: 父を選んだ。父とは離れて暮らしていたこともあり、父本人をもっと知りたかった。
- 室賀: その行為は「描く」という意識でやっているの?
- 顧: 「なぞる」ということに近いかもしれない。



秋元理恵 Satoe Akimoto
「はたけばたけ」



身近な存在である自宅の小さな畑を日々観察し、その観察日記を描いている。ていねいに、ゆっくり五感を澄ますと、途方もなく集まりあう生命のパワーを感じる。そんな感覚を体感してほしくて、あたかも自宅の窓から畑を見るように作品を見てもらえる展示として机と椅子を用意した。

〈質疑応答〉

- 菊地: 原画を多く展示せずに作品をコピーしたものを見せようと思った理由は?
- 秋元: 最初は原画を展示してみたが、会場全体のバランスを見てコピーの展示の方がしっくりきたので。
- 高井: もっと畑の作品を多く展示するかと思って期待していたが?
- 秋元: 個展は畑だけにするといいのだが、今回は自分が一番見たい気持ちに素直じゃなかったかも。



田中豪 Go Tanaka
「スタンド・アローン・コンプレックス」



いろいろと試行錯誤を繰り返した後、曾我蕭白の絵と落書きを組み合わせて描き始めた人物シリーズ。人物が並ぶ姿から「スタンド・アローン・コンプレックス」というタイトルが浮かび、その言葉の形として表現したいと思い、絵の一枚一枚を会場の壁に溶け込ませる展示にした。

〈質疑応答〉

- 高井: 最初のポートフォリオでは立体作品を展示するプランもあったが?
- 田中: フィギュアの素材で作ったかったが、技術的、時間的に間に合わなかった。平面だけの展示の方がうまくいかなった。
- 菊地: 展示している作品のサイズや、ベースの素材に透明シールを選んだわけは?
- 田中: 大きいものも試したいという気持ちはある。シールにしてチープ感を出したかった。
- 菅沼: キャラクターの設定は?
- 田中: 物語性はまったくない。人というより落書きに近いので。



小田原亜梨沙 Arisa Odawara
「my diary」



落書き感覚で、行動の断片や、ふとした時に垣間見る風景などを、絵日記と称して5年前からB5サイズの色画用紙に描き続けてきた。今回の展示ではそれを引き伸ばし、薄いペラペラなB2サイズの紙に描いた。音楽を聴きながら絵を描いているが、個展ではその過程を展示にしたい。

〈質疑応答〉

- 大家: この絵を描いて、どんなふうに広げたいのか? どこに聞きたいのか?
- 小田原: イギリスのテートモダンに飾られたらいいと思うけど……。まずは全体を一つの本の形にしたい。
- 室賀: 絵日記と言っているが、どんな時間軸で絵を描いているの?
- 小田原: 1日に20枚描くこともあれば、5日描かないこともある。



大小島真木 Maki Ohkojima
「足もとに流れる深い川」



私の描く絵にはそれぞれ物語が練り込まれている。震災や戦争、文明の発達、人類の進化など……さまざまな出来事を起点に物語を見せ対峙してもらうことで、現在、過去、未来を考えるきっかけになればと思う。作品を通して視野を多角化し、柔軟にさせ、心のすきまを作りたい。

〈質疑応答〉

- 菊地: 絵を写真に撮った小さな作品があるが、なぜ原画を展示しなかったの?
- 大小島: 原画は大きな絵の作品だが、スペースがなかったの小さな写真にした。
- 室賀: 展示した絵の配置と背景にある物語に関係はあるのか?
- 大小島: 基本的には左から右へ絵の背景にある物語が繋がるように配置している。

■審査員の感想

ここから菅沼さんが進行。審査員の佐野さんが仕事の都合で公開審査を欠席することになり、あとの4人に全体的な感想を聞いた。菊地さん：「どの作品も、とても面白くて甲乙つけがたい。ただ、作家本人が制作過程を大事にし過ぎているのが気になった。プロセスへの個人的な思い入れよりも作品そのものを大事にしてほしい」。大塚さん：「僕も同じことは気になった。もっと自分を客観視することが大切だ。表現については、今回の6人はみんなバラバラでバラエティーに富んでいる。実力は横一線でグランプリを選ぶ基準が難しい」。高井さん：「ポートフォリオレビューで新しい表現を意識的に選んだ結果、この6人がファイナリストになった。展示も全体的によかったと思うし、これからどう成長していくのかが楽しみ」。室賀さん：「もうすぐ3.11の震災から1年が経過しようとしている。今、この瞬間に何かを作るという行為そのものをどのように考えているのか気になった」。



続いて各審査員にファイナリスト一人ひとりについての感想を聞きながら、この日欠席した佐野さんがあらかじめ審査したコメントを菅沼さんが読みあげた。○1丁目さんの作品について。大塚さん：「絵でちゃんと表現できる画力がある。この展示は、これはこれでアリだと思う」。高井さん：「この展示は漠然とウルトラQの感じが出ていて、重々しくなっていないところがいい」。菊地さん：「背景のテープも作品として成立している。ただ手前に絵があることで、単なる背景に収まってしまっているのもつらい」。室賀さん：「作品の質感は好き」。佐野さんのコメント：「画力のある人。絵よりも背景が目立ち、ポップになり過ぎた」。○秋元さんの作品について。大塚さん：「衝動的な部分が強いと思っていたが、意外と理性的に考えられた展示で、そのギャップにとまどった」。菊地さん：「制作現場を見たいのではなく、こちらが見たいのは絵そのもの。絵自体に魅力があるのにそれに気づいていないのでは」。室賀さん：「自然に対する人為的な表現で、言うなればサイエンスだと思う。芸術と科学がまだ分離していない頃の表現だと考えてみた」。佐野さんのコメント：「自分と畑というコンセプトは面白いが、小ざっぱりし過ぎてつまらない。もっと本人の畑フェチな部分が見たかった」。○小田原さんの作品について。大塚さん：「作者の制作風景はすごく見える展示だが、今後どうなっていくのか展開が見えなかった」。高井さん：「絵が独特で魅力的。この作品はエディトリアルに向いていると思

う。この展示方法では小田原さんが本来持っている魅力が出切っていない」。菊地さん：「二次的な操作を加えたいくなる絵。それはイラストレーションとして大事なこと」。佐野さんのコメント：「伸びやかで女性ならではの作品は魅力的。力の抜け加減がよく、見る側の入り込む余地を残している」。○顧さんの作品について。高井さん：「自分のオリジナリティーとしての時間軸にとらわれて損をしている。一次審査、二次審査と見てきたが、回を追うことに成長している」。菊地さん：「描く」というより「たどる」行為。一つのラインの造形は美しく完成度が高いが、それだけに留まっている。室賀さん：「制作プロセスにこだわるのは前に流行ったこと。完成度は高いけど決めすぎていて、見る側の入り込む余地がない」。佐野さんのコメント：「展示はよかったが、作品自体には難解さを感じる」。○田中さんの作品について。大塚さん：「好きな作品。この展示方法のチープさには好感が持て、可能性を感じる」。菊地さん：「実は完成度が高い作品だ。ポートフォリオにもこの作品しかないで、今後の展開をどう判断するか難しい」。室賀さん：「方法と世界を持っている。どんな媒体にも載せられる、完成度が高い作品」。高井さん：「一次、二次審査では私の中ではスッチギリ1位。タイトルとキャラクターがコンセプトで完成度が高い。しかしプレゼン聞いて考えの甘さが気になった。作ることにしつこさを持って欲しい」。佐野さんのコメント：「キャラクターに名前を付けていないところがよい。いい意味での完成度の低さが見る人に考えさせる」。○大小島さんの作品について。菊地さん：「作品の背景の物語は過剰。1枚1枚の絵をもう少し信じてあげて展示したらよかった」。高井さん：「いろいろな才能があり過ぎて邪魔している」。大塚さん：「単純に絵だけでもいいのでは。物語を知らせない方が見る人にいろんな見方を与える」。室賀さん：「盛り盛りの感じがする。もう少し洗練された方がいいのか、削ぎ落とすことで魅力がなくなるのかもしれない」。佐野さんのコメント：「一点一点の絵はよかったが、作品のサイズや展示方法がバラバラで、見ていて疲れる。展示がよくなかった」。



■審査員による投票

一人ひとりに対する感想を聞いた後、各審査員にグランプリ候補を2名ピックアップしてもらった(佐野さんは事前に選んでいる)。結果は……

大塚／1丁目 田中
菊地／秋元 田中
高井／顧 田中
室賀／秋元 田中
佐野／小田原 田中

これを集計すると、田中5票／秋元2票／1丁目1票／小田原1票／顧1票

「こんな結果が出ましたが、みなさんどうでしょう？」進行の菅沼さんが、満票を獲得した田中さんをすんなりグランプリとするかどうかの是非を各審査員に問う。大塚さんが「ファイナリストには誰がグランプリになってもおかしくない6人を選んだ」と言えば、菊地さんも「田中さんは全員が票を投じたけど、それ以外の人もほとんど票が入ったことが象徴的だと思う」と集計結果ほど実力差がなかったことを強調する。ここで菅沼さんが2票を獲得した秋元さんについての意見を促すと、菊地さんが「秋元さんは十分可能性のある人だが、展示が失敗だった」と一歩及ばなかった理由を説明。大塚さんも「秋元さんは今後が楽しみな人だが、今回グランプリかと言われると疑問」と言葉を濁す。かわって田中さんについては、大塚さんが「個人的にこのチープさは好き。展示も壁と一体化させるという考えは新鮮で、いい意味で裏切ってくれた」と推す。菊地さんは「危うさと尖っている部分が同居している。すごく計算されたチープさで瞬間的な強さもある」と高く評価。高井さんも室賀さんもグランプリは田中さんということに異論はない。「それでは第6回グラフィック「1_WALL」のグランプリは田中豪さんに決定」と菅沼さんが宣言し、会場から大きな拍手が起こって公開審査が終了した。



■出品者インタビュー

1丁目さん

今回「1_WALL」に応募したのは、ファインアートがグラフィックの世界でどんな評価をもらえるか知りたかったから。よい気付きを得ることができた、よい機会になりました。

秋元理恵さん

公開審査は楽しい。自分のことをまだわかっていない部分があって、そこを耕されたという感じです。もっともっと描きたくりました。失敗を失敗で終わらせないように、がんばります。

小田原亜梨沙さん

やりたいことは全部できました。審査員の方から言われた「詰めの甘さ」は今後の課題です。私の絵の持ち味を殺さないように、これから先がんばっていききたいと思います。

顧 彬彬さん

自分としては100%の展示をしたいと思って、100%の力を出し切りました。展示で試したいこともでき、後悔はしていません。何を他人と共有したいのか考えさせられました。

田中 豪さん

グランプリ受賞という結果は予想外でした。ただし自分なりにグランプリを獲得するための努力はしてきたつもりです。審査を通してコメントをいただき、自分にはまだまだ課題があることがわかりました。これを機にもっと発展していけたらいいと思っています。一年後の個展には立体作品も熟を入れてつくりたいです。どうもありがとうございました。

大小島真木さん

今日、自分の弱い部分がわかって、これから伸ばさないといけない箇所がわかりました。公開審査という形式は、とてもいいコンペだと思えます。

<文中一部敬称略 取材・文／田尻英二>

■お問い合わせ先

株式会社リクルート ガーディアン・ガーデン
〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5 リクルートGINZA7ビルB1F
TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512
HP:http://rcc.recruit.co.jp twitter:@guardiangarden